あの混乱の中で、情報を発信し続けたプロの姿勢に敬服

「被災地にある新聞社として、伝えなければならない状況があり続けている。伝えなければならない声、伝えていきたい声があるーーー」と、その「報道姿勢に基づく多角的な震災報道、企画記事は、被災地、被災者に寄り添う地元新聞社ならではのものとして、２０１１年度新聞協会賞編集部門」で新聞協会賞を受賞した「河北新報のいちばん長い日～震災下の地元紙～」を購読した。

「一日たりとも休刊にするわけにいかない！」との地元紙の報道機関としての責務から、ライフラインストップ（河北新報社本社は、自家発電作動）、機材転倒、電送器機の破損、道路事情や被災状況未確認、避難場所の未確認、ガソリン不足や携帯電話不通の中での取材活動開始、販売所や配達員の安否未確認、などなどの状況の中で、日頃は取材合戦相手の他社からの支援も得ながらも、新聞をどう発行し続けたかが、時系列で検証も含めながら記録された本であった。

河北新報は新聞には掲載されなかった記者の取材メモや被災者の声を、地元紙ならではの被災地を定点観測的に掲載するシリーズ企画も新聞協会賞に繋がったのだろうなあと思う。

河北新報社本社ビルは仙台市内中心部にあり、あの日の街中の被災状況も本書で始めて知った。
自分は震災後直から携帯ラジオを聞いていたが、宮城県沖地震や淡路・阪神大震災の被害を目にしているので、火災発生や道路破損や家屋倒壊は今回の大きな揺ではさもありなん所もあるだろうなあと聞き流していたのか、当日の情報記憶で今も残っているのは「若林区荒浜で２００～３００の遺体」という情報。

当日は後で知る津波被害の甚大さなどイメージできるはずもなく、具体的数字なだけに「一地区でこんなに多くの人が一気に亡くなるなんて、何かイベントで人がたくさん集まっていたのかなあ～」と思ったもの（この情報は、「未確認情報」として県に報告されたものが、あの震災直後の混乱の中で確証を得られないまま流され続けたことが、後々の検証で明らかになった）。

災害では、「被害情報が手に入らないのは、一番情報が必要な被災地」とは聞いてはいたが、正にその感であっただけに、自らも被災者であっただろうに、あの混乱の中で何とか情報を発信・提供しようとした、河北新報社の新聞製作、輸送、配達に携わったみなさんのプロとしての姿勢に敬服する。

阿部幸泰　　（2011 年 12 月 2 日　記）